

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

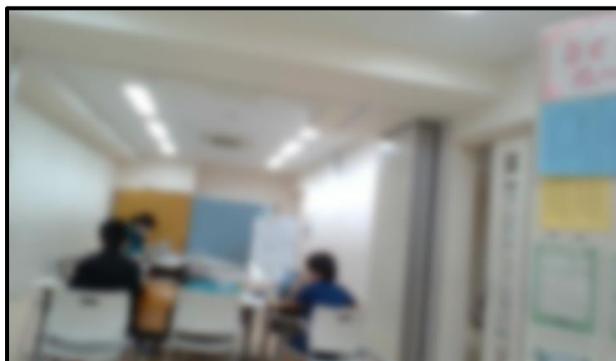
【取組 1】(A中学校)

本校では、令和5年度から校内別室を開室し、現在は日常的に4人の利用がある。生徒にとっては、様々な事情で教室に入れなくなっても、校内別室に登校できるという安心感がある。

校内別室を利用する生徒は、校内別室が落ち着ける場所となっている。また、校内別室には常に数人の生徒がいて、支援員も常駐しているので、孤独を感じることなく過ごせている。

さらに、本校には校内別室とは別に、生徒が主体的に学ぶことのできる部屋があり、教室内の人間関係を越えて、生徒同士が互いにコミュニケーションを取りながら学びを深めることができる。

加えて、総合的な学習の時間等では、他学年の生徒と交流できるように教職員が生徒に働き掛けている。特に、上級生、下級生との交流を通じて、社会性を育む場と機会の提供ができています。



【取組 2】(B中学校)

校内別室に登校している生徒の要望を聞き、校内にしながら安心できる心の居場所となるように対応している。それぞれの生徒が登校する時間帯は異なるため、生徒一人一人の状況に応じて、1日の過ごし方を決めるよう工夫している。例えば、「今日は何をするか」、「何時に下校するか」、「給食はどうするか」等の1日の過ごし方を生徒自身で決めている。定期考査や学校行事に関して心配なことなどの相談もあるので、学年の先生に伝えてほしいことなどは、生徒本人に確認をして共有している。

【取組 3】(A中学校)

区主催の特別支援教育の研修会で、講師から提供された資料を参考に、校内研修を実施した。特別支援教育コーディネーター等が講話内容を解説し、グループ協議を実施した。グループ協議では、不登校生徒の支援に係る現状や実践等の意見交換を行った。研修の資料に具体的な支援例が多く掲載されており、参加した教員がその資料を参照しながら担当する学年、学級にあてはめて考える機会を作ることができた。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（A 中学校）

毎週開催している校内委員会において、「不登校・気になるファイル」を利用して情報の共有を行い、支援策を検討している。状況に応じて SSW が対応し、外部機関につなげている。

不登校	気になるファイル	支援策
生徒A	不登校	SSWによる個別支援
生徒B	気になるファイル	外部機関との連携
生徒C	不登校	校内委員会での共有
生徒D	気になるファイル	SSWによる支援
生徒E	不登校	外部機関との連携

アウトリーチによる支援（C 中学校）

SSW と毎週 1 回会議を行い、家庭訪問時の保護者への支援の内容や、聞き取った保護者及び生徒の要望等を共有して、生徒が校内別室に登校した時の支援の参考に使っている。

校内別室における支援（B 中学校）

校内別室に登校した際に、利用する生徒が、「①今日は何をするか。（自習、読書、総合学習の課題の取り組みなど）」、「②何時に下校するか。」「③給食はどうするか（自分で取りに行く、友人に運んでもらう、学年の先生に運んでもらう。）」等の計画を自分で決めている。定期考査や学校行事に関して心配なことなどの相談もあるので、学年の教員に伝えてほしいことなどは、生徒本人に確認をしてから学年の教員に共有している。また、対象生徒が数人、同じ時間帯に登校しているときは、百人一首に 30 分程度取り組むなどして、リラックスできるようにしている。

デジタル機器を活用した支援（A 中学校）

不登校生徒への支援としてタブレット端末内のプライベートチャネルを利用している。また、校内別室を利用する時間を担任に連絡したり、オンラインで配信される授業に参加したりすることなどに活用している。

関係機関との連携（A 中学校）

支援会議で検討した支援策などを基に、SSW との情報交換を毎週行っている。そして、支援を必要とする生徒の家庭訪問を計画的に実施するとともに、必要に応じて外部の関係機関との連携を図っている。

成果

校内別室に継続的に登校できる生徒が増えてきた。校内別室を利用することで、生徒一人一人の困り感を理解することができ、どのような支援が必要かを考えることができた。

課題

生徒が抱えている困り感を把握し、SSW、SC と相談して次の支援先につなげるための検討時間がかかることに課題がある。